

9年目を迎えたオンラインによる海外との交流活動

12月11日(月) 6年生の児童が、台湾の高雄市の小学校とオンラインを使って英語で交流をしました。富山県立大学 清水義彦先生のご指導の下、こうした外国の児童とオンラインによる交流活動は、今年で9年目を迎えます。

交流活動が始まった当時は、大型のモニターやプロジェクターを使って、多対多の形で交流を行いました。一人一人が交代でカメラの前に出て、決まった話型で表現するという活動でした。この頃子供たちが一番盛り上がったのは、フリートークでした。使える英語の語彙や話型が少なくても、子供たちはジェスチャーやパネル等を使って、楽しく互いの表現を伝え合っていました。こうした姿を捉え、その後、清水先生は交流相手の先生とも相談され、さらにICT機器も準備されてグループによる交流活動ができるようにしました。これによって一人当たりの会話時間は増え、交流活動に臨む当事者意識がぐっと高まりました。グループによる交流活動の当初、タブレットから距離を置いて話していた子供たちでしたが、時間がたつと次第にタブレットの画面に近づき、頭を寄せ合うようにして相手と話す姿が見られ、意欲の高まりを感じました。

現在もグループによる交流活動を行っていますが、今では一人一台端末を使って、自分の表現したいことをタブレットの画面に映し出して話をしています。まさに、欧米の児童が学校などで行う簡単なプレゼンテーション”show and tell”です。相手によく伝わっていないようであれば、グーグル翻訳を使って表現を探したり、または中国語に変換した文章を画面に映して伝えたりしていました。時には、よく聞き取れないこともあります。その場合、事前に用意したパネルやショートフレーズを使って聞き返したり確かめたりしていました。



【タブレットで滑川市の特色を紹介】

特に私が感心したのは、相手の会話に対して様々なショートフレーズやジェスチャー等で反応していることです。自分が話したことに対して、笑顔やいいね等の反応があるとうれしいものです。今回は「in japanese (日本語では)」と切り出し、相手に合わせて日本の様子や生活・文化を伝えるという場面もありました。会話の流れに合わせて子供たちは発話し、双方向の会話となっていました。

交流活動が終わって、多くの子供たちの顔が紅潮しているのがとても印象的でした。活動中、あちらこちらから笑い声が聞こえ、終わっても気持ちが高揚していたのでしょう。清水先生から、「今年、県内数十校の小学校で外国語の授業を見てきたけど、みんなが一番です」と大変うれしい励ましの言葉をいただきました。

この活動が始まった時から二つのねらい「1 自分が習った英語を使って海外の児童と交流することで、英語を学ぶよさを感じ、英語をさらに学びたいという意欲を高める 2 異文化理解をとおして交流相手と親睦を深め、国際的視野の基礎を養う」を設定しています。活動後のアンケートでは、「台湾の人たちと仲良くなれた」「すごく話がもりあがった」「台湾の人達は、丁寧にゆっくりと話をしてくれてとても分かりやすかった」「台湾の人が日本語を思った以上にしゃべれていた」「ポケモンカードを知っていますかと聞いて、交流した人全員が知っていることにびっくりした」などの記述がありました。9年間の活動の積み重ねが、子供たちの姿となって表れていることをとてもうれしく思っています。

今回紹介した学習活動に限らず、今年も学校の学習や行事等で家庭や地域、関係機関の皆様に変なお世話になり、ありがとうございました。皆様、どうぞよいお年をお迎えください。 (校長 広田 積芳)